

---

# 大家さんは高校生

こうびー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大家さんは高校生

### 【NZコード】

N3737C

### 【作者名】

じうびー

### 【あらすじ】

高校生なのに大家。そんな西瓜荘の大家・古木司のいろんな大変な騒々しい日々。

## 第一話（前書き）

初めて小説を書きます。アドバイスよろしくお願いします。

## 第1話

今日は入学式。新入生は表情が固い、みんな緊張している。

校長の永劫とも思える長つたらしの話が終わり、やつと教室に帰ると新入生達が思つたら

ヒューン

ドカン

という音がしたと同時に辺りは白い煙りに包まれ。

「ハーツハツハツハツ」

笑い声が聞こえ。ステージには、長い髪を後ろで纏てている眼鏡をした少年が現れた。

「新入生諸君！！僕の名は古木 ふるき 司つかさだ。君達はこの片山高校に来た

ということは、近くの片山大学に進学するな？」

大半の新入生は心の中で肯定する。事実、片山大学へ進学する生徒は七割はいる。

「そこで卒業したら、僕が大家をするアパート。西瓜荘に来てくれないか？」

新入生達はポカーンとしている。

「もし住んで見たいなと思う生徒が居たら一年四組まで来てくれ。サービスしちゃう（はーと）」

『あと…

「コラアア古木」いかにも体育教師という体の男が怒鳴る。

彼はヤバッと思い逃走。体育教師は追跡。全校生徒はそれをボローンと見る……体育館には影の薄い教頭の

「入学式を終わります。」といつ言葉がこだました。

一年生は

「何だアレ？」と戸惑い。一年生は

「今年もかよ！」と苦笑い。三年生は

「自分達の時の方が凄かつたなあ…。」と思いつ出すのであった。

何とか逃げ切った司。

『ふう何とかまいたな。ちつ、もう一年生帰つてんじやん。あとはホームルームだけが、帰ろつと』

「待ちなさい」

振り返ると、担任の月下つきした 遥先生はるかが居た

『あ、月下先生…。』

なんか少し呆れてる？

「また派手にやつたわね。」

『だつてえインパクト必要でしょ？』

「必要ありません。大体、校長先生から伝伝の許可ははってるんだから普通しなさい。」

『相変わらずクールだなあそんだから恋人が出来な…』

『引っ越しすわよ？』

『すいませんでした。』即座に土下座する僕。何を隠そう月下先生は西瓜荘の住人なのです。

『今年は卒業して引越した人多かつたから、つらいのよ（泣）。』『

「ならもう少し真面目に勧誘なさい。」『はーい。』

「じゃあこのプリント持つて

『なぜ？』はじめ？』

「私のホームルームサボつて帰らうとした罰。ほら行くわよ?」

『はーい。』

プリントを持つ僕。うわ地味に重いこいつ…

そして教室に向かう僕ら…教室に行く途中、体育教師に見つかり殴られた司だつた。

## 第1・5話（前書き）

一回まだ一回まだなので1・5話ついで……。

教室に入る僕と月下先生。

するとクラスメート達はこいつを見て直ぐ目を反らす。

（うーん。嫌われる？）とりあえずプリントを教卓に置く。

「席につきなさい。」

席に着く僕たち。

「これからクラスで最初のホームルームをします。まず、自己紹介からかな？」

誰からさせるか悩む先生。

『じゃあ、まずは先生からお願ひします。』

「なぜ？ 私から？」

わあー、スゲエ冷たい視線。

『だつてえ教師がまず手本を見せないと……』

「やれやれ、わかつたよ。私の名前は月下遙。担当は数学だ。趣味は……」

こつちを見てくる先生… アイコンタクトで  
「私の趣味何だ？」

と聞いてくるので『読書じゃない？』とジョースチャーでかえす。周りの席の奴らに変な目で見られた…ぐすん。

「趣味は読書だ。よろしく。面倒だから右端のやつから自己紹介していけ。」

そして自己紹介が始まった

「俺の名前は高地昇。たかちのぼる 趣味はスポーツ。みんな一年間よろしく(元こつこつ)」

おおつこいつ好青年だな… 笑顔が光ってるぜ。やばつ次は僕だ

『はい皆さんご存知の古木司でえつす。趣味は寝ること。西瓜荘の大家やつてまーす。皆さん片山大学に行くなら、是非西瓜荘へ。よろしく（ニヤリ）』

前の人見たいに笑顔をきめる。きまつたな僕

しかし周りから見たら黒い笑顔にしか見えなく、不気味に映つてしまつ悲しき同君であつた。

ホームルームが終わり、先生が  
「じゃあこれで解散。各自教卓に置いてあるプリント持ち帰り読んでおけ。それでは解散。」  
鞄を取つて帰ろうとする僕、すると  
「古木君、一緒に帰らないかい？」  
とさつきの好青年。

『君はええっと・・・、徳川次郎三郎源朝臣家康だっけ？』  
「高地昇だよ。君の前の席のね。それより一緒に帰らないかい？」  
『君はええっと・・・、徳川次郎三郎源朝臣家康だっけ？』  
「無限ループ？」  
『冗談だつて。いいよ別に一緒に帰りますか。』

校門を出で

『そういうえば徳川次郎三郎源朝臣家康はどこに住んでるの？』  
「だから高地昇だつて・・・西瓜荘の近所だよ。」  
『ちつ勧誘は無理か？』  
「ごめんねえ

『まあいいさ。』

それから他愛の無い話をして。

「俺こっちだから、、じゃあな。」

『さいならー。』

自宅の道を一人で歩く僕だった。

短い坂の上に広い一階建ての家があるそれが僕の家。  
自宅に鍵を開ける。

『ただいま。』

返事はない・・まあ一人暮らしだからなあ。  
ここには居ないが兄が一人それが僕の家族構成。

自分の部屋に荷物を置いて学生服から着替え、台所で夕飯作つてると。

ガラガラと玄関が引き戸が開き

『めんぐださーい』

と人の声

『はーい』

料理を中断して玄関に向かう。

「やあ、こんばんわ司君。今月の家賃持つてきたよ。」

「持つてきたぞー」

二人の背の高い大学生が来た。

痩せつぼちで口調が優しいのが水上  
筋肉質で荒つぽい口調なのが桐原

みずかみ  
きりはら  
えい  
よう

陽一

『まあお茶でも出すんであがつて下さい。』

「おじやまします。」

「じゃまするぞー。」

客間に行く一人。お茶とお菓子を用意を持って行く。

『どうぞ』

お茶をお菓子をテーブルに置く。

「ありがとう。これ家賃ね」

「『苦労。ほれ』

『ありがとうございます。』

それからお互いの学生生活について語っていると  
ガラガラ。

「古木～家賃持つて來たよ。」

月下先生も來た。

「月下先輩久しづびりですね。」

「月下先輩久しづびりッス。」

「ああ君達も來てたのか…。久しづびりだな。」

会話をしようとしたら -

ボーン。ボーン。と古時計が鳴り

「もうこんな時間か…飯どうする?」

『食べて行きますか?』

『いいですよ。いつもご馳走になつてますから…。』

「そうだね。今日はいいよ」

「イヤここで食つてくぞ陽、先輩。司すぐに飯作れ。」『はい。少し待つて下さいね。』台所へ行く僕。

「しかたないな。私も手伝うか。」

残された二人は料理が得意じゃないから待機するのだった。

『影一。無理矢理世話になるのはどうかと思いますよ?』怒り気味に言つ陽。

『いいじゃねえか。』

「よくないですよー。」

「そんなに怒るなよ。あいつ一人で飯食うの寂しいなあ…って言つてたしな。俺達が家族みたいに飯食つてやるぜ。それにあいつの食費が厳しいなら、金は出すさ。」

影一は笑顔で言つ。陽は驚いて言つ

「貴方は思いやりがあるんですね。」

「つるせえ。」

照れる影一であつた。

一方台所では…

『これ皮切つて下さい。』

「ああ。わかつた。」

黙々と料理をする私達。

「なあ司?」

『なんですか?』

「迷惑じゃないか?」

『何がですか?』

『いつもご飯作らされるのが…。』

『そんなことないですよ。嬉しいですよ。』

彼は笑う。

『一人で夕飯吃るのは、寂しいし。誰か食べてくれるなら嬉しいです。』

『そうか。じゃあなるべく世話にならつか。』

『はい。そうして下さい。』

笑顔で答える。

彼の笑顔が綺麗で私はドキッとした。

今日は短いです。

なんか先生の顔が赤い風邪かな……。

『大丈夫ですか？顔赤いですよ？』

顔近づける。

「なな何でもない。大丈夫だ！だからあんまり顔を……」  
慌てる先生。

ヒュン

顔面ぎりぎりに先生が握つてる包丁の刃が掠める。回転して次の  
斬撃が襲つてくる！！

『うおっ危ね！先生落ち着いてえ。細切れはイヤー。』

「すすすすすまん。』

一方そのころ

「何を作つてるのでしょつか……。』

「…………さあな。』

ちょっと心配な一人だつた。

『できましたよー。』

二人を呼ぶ僕。

夕飯は焼き魚。煮物。おひたし。豆腐とワカメの味噌汁。白米。を作つた。

『…………』

「おかわり！！」

「よく食べますね。貴方は……」

「この煮物美味しいな。」『ああ……それはですね……』

楽しい食事だつた。

力チャ カチャ

料理してないから洗い物をする。と彼らが言い今に至る。

先生とお茶を飲む僕。

ズズウー

かつ会話がないよ

「ねえ」

『はい？』

「学校楽しい？」

『はい。先生は？』

「私？普通。仕事だしね。」

『クールだなあ……』

しばらく会話をすると……

「洗い物終わりましたよ。」

『終わつたぞ。』

『あつご苦労様です。』

二人にお茶を出す。

四人で他愛のない会話が始まる。

ボーン ボーン 古時計が鳴る。

「もう10時か… ああてと帰るか。」

「そうですね。」

「帰るか。司、遅刻するなよ。」

「はーい。みなさんもよつならー。」

一人になると途端に静かになるな  
風呂入つて寝るか…

ふいー今日も楽しかつたなあ。

風呂に入つている僕。

一般家庭よりもかなり… いや相当広いだろな… 浴槽もでかい風呂場自  
体も広い

死んだ祖父さんが広く作つたらしい…。一人暮らしには沸かすのも  
掃除面倒。ながら普段はシャワーのみたまにいれるぐらい。

『あがろつと。』

下着と浴衣みたいな着物を着る。パジャマみたいなもんだなコレ。

明日の朝食の為に米をといでおぐ。ふむ11時30分か…。

髪乾かして歯磨つて寝よ。

早めの就寝する司だつた。

## 第2話（前書き）

毎回読んでくれてありがとうございます。

『ん…。』

目が覚める。時計を見ると6:30起きるか。

『ふあ～天氣いいから洗濯するかあ。』

身支度して制服に着替えて、洗濯機を回して朝食と弁当を作る。

『ん～よし出来た。』

次は洗濯したのを干すので庭に出る。

パン パン  
干していると

「おはよう。同ちゃん。」隣の家の庭から声がする。

「あ、おはようございます。夏月さん」

声の主は 鳴島 夏月さん

髪は肩までで、ウエーブがかかっている美人な未亡人。

『今日もお綺麗ですね。』

「あらあら、お上手ね。」可愛い笑顔だなあ。

『本当ですって』

「ふふふ。ありがと。」夏月さんも洗濯物を干しているようだ。  
少し話をしていると…

「そろそろ秋菜の朝ご飯作んなきや。またね」

『あつはい、また』

手を振つてバイバイして夏月さん。

秋菜とは夏月なんの娘さん。今年で小学5年生。

朝食を食べて歯磨きして準備万端。7：40余裕だな…

『さあて学校行くか…。』

学校につくと…

グラウンドで高地昇が朝練してた。

『きや～昇くうん頑張つてえん（はーと）』

女の子の様な声援を送ると

ドグシャアーーー

あつ盛大にこけた。

「古木君…悪ふざけが過ぎるよ。」こっちを見て答える彼。

『もおボルボルつたらあ照れちゃつて』

因みにのぼる＝ボル＝モルボル＝ボルボル。

「人を臭い息吐くモンスターみたいに呼ばないで…。あとその声も  
辞めて…。」「うむ。おはよう高地。うぬは何をしているのだ？」  
今度は渋い声にする。

「部活だよ…。普通にしない？あと昇でいいよ。」

『のり悪いなあ。僕も司でいいよ～？』

「うん。わかつたよ司」

「オーイ昇。早くしろおーーー！」

「あつ先輩今行きます。また後で司。」

『うん。モルボルも頑張つて。』

「モンスターにしするなーーー！」

昇と別れて教室に向かう僕。

「なあ」  
「何ですか？先輩」

「あいつ、古木司だろ？お前恐くないのか？」  
「いえ別に気のいいやつですよ。」

少しふざかるけど…。

「あいつ……

したんだぜ？」

「ええ？ そうなんですか？」 びっくりした。

「ああ。だからあんまり付き合わないほうが…」

なんだかその言葉にイラつとした。

「先輩。失礼します」

「あつおい。」

部室を後にする俺だった。

着きましたよ我が教室。ガラガラ

「あ、おはよ。司」

『おはよう。澪』

数少ない話し相手…林澪はやしみおだ。髪は短い肩より上。元気活発な女の子。

「あ…おはよっ。」

『ん？君は』

『昨日自己紹介したでしょ？不一ふじ桜さくらよ』

澪が教えてくれる。

んー昨日の自己紹介を思い出す。

「儂の名は林澪だ。うぬらの体を搾って血を飲んでやるわ…」

バイオレンスをじてとつとも泣こ声。

「…私の名前は…不一桜です。よろしく。」

『ノン…！

固に拳が頭にヒットする。

「ちよつと待て…私はそんなことってない…」わ…。壇田君

していたか不覚…頭の激痛に耐えて

『よろしく。不一桜。』

「ひつ…」

恐がる不一桜。ああせりまつ僕の口怖いんだなあ…

『あつこめこね。』

教室を出る。

うーんなんか教室に面あらくなつて屋上にいる僕だった。

「桜…。あんた」  
「だつてあの尊…」  
「信じてるの？あんなこと…」  
「…うん。澪ちゃんは？」  
「信じるわけないでしょ。あこつはあんなことしないわよ。」

### 第3話（前書き）

彼と彼女のちよつとした過去です。

季節は秋。

一年生の時のお話

月下 遥は美人である。髪は腰まで延びてサラサラの綺麗な黒髪。体もでるところで、ひっこむとこひっこんでようするにナイスバディなわけだ…。身長も170ぐらいで高い。そんな容姿なら男子生徒の憧れの的だ。

「あ～あ月下つて綺麗だよなあ～」  
「そうだなあ～ああいう彼女欲しいよな～。」  
「俺も～」  
「お前もかよ！…実は俺も（笑）」  
「あいつの家に行つて何処よ？」  
「さあ？まさかお前？」  
「冗談だつて」  
「たしかあいつの家アパートじゃね？」  
「マジ！？何処の？」  
「ほら一年に古木つているだろ？」  
「あいつの所よ。」  
「へ～（笑）しゃあまあこつ齧して月下の部屋の鍵貰つてよ

「うわー（笑）お前鬼畜～。」

「じゃあ、放課後古木の所行くぞ」「  
体育館の裏でたむろしている。奴ら  
人それを不良と言つ。

知らない人達だ。髪型や色が個性的な人達だか不良か…ん三年に不良グループがあるって言つてたな…。

『ああ～聞かなきやよかつた。今の話。』  
体育の授業だつた司はめんじくさそうに呟いた。

キーンゴーンカーンゴーン

「よう！…古木」

うわっ！？本気で來た。

『何ですか？』

警戒して聞く。いつの間にか教室に居るのは僕らだけになつていた。

「なあ月下つて綺麗だよなあ

『はあ』

「俺達みんな月下好きなんだよね。」

『告白なら本人の前でお願いします。』

「单刀直入に言つ。月下の部屋の鍵よこせ！大家なら持つてんどう  
？代えの鍵」うわー何考えてんのこの人達。馬鹿？

『……いやです。』

「へえ～（笑）逆らうの？」

『はい。当然です。』

「ああ～友好的にしたいのになあ

『誰が手を貸すかよ（笑）』

「あん？てめえぶつ殺す！！」

「なめてんのか？こっちは何人いると思つてんの？（笑）』

ふーつ。深呼吸、落ち着かせる。否、感情を冷酷にする。

「つらああー」

不良（A）がパンチを繰り出す。遅い…  
かわしてその腕を掴み背負い投げの要領で投げ強く床にたたき付ける。

「がつ…」氣絶したか…。

『どうした？殺すんだろ？』

他にまだ五人いる。「五月蠅い。黙れ！！」

蹴りが来る。

簡単に回避する。軸足を払つて大外狩りのよつに叩きつける。

「ぐつ…。」

氣絶。

何人かは氣絶。後は痛みでうずくまる奴などをして、あとはリーダー格の男奴だけだ。

「クツソオオ！！」

懐からナイフを取り出す。『そんなもので僕を殺すのか？』

「本氣でぶつ殺す！！」

ナイフを構える。頭が熱くなつてゐなーいつ…。

ブンッ ブンッ

単純な切り付け。しかし振るのには慣れているのか素早い……一撃目は油断して少し切られる。一撃目は軌道を読んで簡単に回避。

ヒュン

突きを横にかわしその腕を捻り関節をきめる。

「痛つ……」

同時に握っていたナイフも落ちる。そして……

「何をやっている……！」

体育教師が怒鳴り声をあげ教室に入つて来て僕らを引き離した。騒ぎを聞き付け他の残つていた生徒も見に来る。

「どうこうことだ？ 古木！！ 貴様がやつたのか……！」『はあ……まあ

……』

めんどくさいから曖昧に  
答える。

「そりなんですよ先生。いきなりこいつが……」

リーダー格の男が言う。自分達は無実でいきなり襲われた。と言いで出した。

『なつ……』

「酷いんすよ？生意氣だつて言つて殴りかかつて……。」

「そりなんすよ？」

回復したのか他の奴らも媚びた笑いで言つ。

「とりあえず。職員室に来い。」

「分かりました。」

『……』

(ちつこにつけら……)

奴らの気が向こうに（体育教師）いつた瞬間あいつの落としたナイフをハンカチで包み拾い懐に隠す。

かくして職員室に連行され……僕らは床に正座をせられる。

「どうじつことなんだ?」緊急で教師を集めたらしい……みんなこ  
つちを見てる

「こいつがいきなり殴りかかって来て……。」

「そりなんすよ……。酷くないですか?」

「どうなんだ?古木。」

『……。』

おこおい自分は無実ってか笑いが込み上げてくる。

「何笑ってんだ!!古木!!」

ガスツ

殴られる。投げてもよかつたが教師を投げて退学になりたくないの  
で我慢する。『痛てて……いやくだらないなあ……と思つて。』

「んだと?」

「ぶつ殺すぞ……。」

『だいたい殴られたのは誰?何処?』

「えつと……。』

『いきなり躡ぐ。嘘つくならあんたら団結しなよ(笑)』

『混乱してるだけだ……。』『あとなんで僕のクラスで喧嘩したのか  
な?襲うなら廊下とか。あんたらの教室だろ?』

『うつそれは……。』

『そしてこれ……。』

ナイフを出す

『こんなもん使つてる時点で駄目だな(笑)信用ないよ。』

『それは俺達じゃねえ。無実だ!』

ちつまだ言い逃れるのか……なら

力チツ

『…………いやです。』

「くえ～（笑）逆らうの？』

『はい。当然です。』

「ああ～友好的にしたいのになあ』

カチッ

「それは……。』

『ボイスレコーダー。いやあ文明の進歩って素晴らしいなあ。もう

少し前のも……。』

「くそっ俺達が悪かった」いきなり罪を認める彼等。

向こうが仲間になれて誘いを断つたから向くなつた。とこいつになつた

結局罪は向こうにあるが暴力を振るうのが駄目だったのか一週間謹慎になつた。ボイスレコーダーは証拠品として没収。そして解放される僕ら。

あいつらも出ていく。その前に

『おい』

彼等に声をかける

『次は無いぞ？分かつてるよな？』

「ひつ！？』

これでいいだろ？』

「ひつん。軽いげんこつを喰らひ

「ひら。不良学生。』

「ふふ大変だつたね』

月下先生と保健医の田辺（たなべ）いずみ先生だ

おつとりして優しい女性。髪は後ろに纏めて、長い髪を肩によつて  
ぐらぐら。

『まあ……暴力を振るつたからしかたないですわ。』

『まつたく君は……？！』

いきなり近づく円下先生。学生服をとり、シャツにさせられる僕。  
そこには血が滲んでいた。

「これどうした？」

『えつと切られた？』

「なんで疑問たんだ君は……いずみ、ここに保健室で治療してやれ  
『うんわかったわ。行くわよ司君。』

職員室に一人になる私。

『まつたく……司は……』

一人つぶやく私だった。

『染みる。痛いよ。やめてええつ』

『司君？ 女の子みたいな声辞めて……。キモイよ。』

『酷つ……』

『だけどよく遙ちゃん気付いたね。愛の力？』

『いや。ただ学ランが切れてるのに気付いただけだと思います。』

『へえ～分かりあつてるのね。』

『いえ。他の先生が気付かないだけです。』

『そう……』

『そうですよ。』

『あーあと。遥ちゃん来るまで待つて』

『へ？ なんですか？』

「いやあ……その……本当は保護者に来てもらひつんだけど……」

『ああ、はい分かりました。』

「その……」

『気にしないで下さい。』笑顔で言ひ。

「うん。ありがとうございます。じゃあ先に帰るね。」

『あつはい。さよなら』

「ばいばい」

一人になりすることがない僕。

『んー何すつかな～』

しまつた遅くなつた。早く保健室いかないと……。  
ガラガラ、電気が着いてなく暗い。

「司？」

『んつ…………』

「寝てるのか」

司は机で寝ていた。ベッド使えばいいのに……。

『ヘックショーン！！…………』

Yシャツたげならせむいだるうと思つて学ランに手をかける  
ゴトッ

「ん？ これはボイスレコーダーさつきのやつじやな  
ピッ

落としたせいかスイッチが入つてしまつたようだ

「よつ……古木」

『何ですか？』

ピッ

そうか…司は私のせいで…。

「ごめん。司。」

『気にして下さい。』

「つー？起きてたのか？」『いや。それ落とした音で…』

「そうか…。なあ『レなんで証拠に使わなかつた？』『えーと。黙秘権を…』

「駄目。」

『えーとアレでだめなら使おうかなつと…。先生に迷惑かかると思つて…。』

「バカッ…」

ギュッ

先生に抱きしめられる僕。何が起きたか理解する顔が赤くなるのが分かる。

「お前は何でも一人で抱えよつとする…。たまには私や周りの奴に頼れ。迷惑かけたつていいんだ。」

『はい。ごめんなさい。』

「あと…そつ、それとだな…わつ、私の為に体をはつてくれて…。ありがとづ。」

耳元囁かれる。多分先生の顔も真っ赤だらつ…。体を離す僕ら。先生は顔を真っ赤にさせ俯いている。『かつ帰りましょう？』

「ああ。」

たいした会話も無く家につく

『また来週（笑）』「ああ」

互いに家につくが、まだドキドキしている一人だった。

一週間たつて学校へ行くと不良達は退学していた。そして、自分には『気に入らないと誰であろうと、ボコボコにする』という危険な称号を頂いた。（新聞部の新聞の見出しより）

それ以降人付き合いは余りしなくなつた。

## 第4話（前書き）

待つてた人（いるのかな？）お待たせしました。

力チャ キイー ガチャーン！！

『つ……ん?』

屋上でそのまま眠つてしまつたみたいだ……。

時計を見る……。ヤバッ 曜休だ！！

『ん~』

背中を伸ばしてると後ろから

「やつぱりここにいたのか……」

『先生……』

月下先生がいた。

「何していたんだ? ホームルームと四限までサボつて……」

『いや~スッコーンと寝ちゃいました。アハハ』

「笑つてる場合? 曜からはでるんだぞ?」

『は~い。わっかりましたあ』

教室に戻ろうとする

「……いいのか? 本当のことクラスのみんなに知つて貰わなくて……。

心を見透かされたかな……

「君は嫌なことがあるとよく屋上にいる」

鋭いなあ……先生。

『ええ……まあいいですよ。そのことわ……』

「どうして?」

『まあ……相手に暴力を振るつたのは事実ですしつつ……。あの入達は気に入らなかつたし。真実話すと先生に引っ越される(収入が減る)可能性が……。』

「でも……」

何か先生が言おうとしてるが気にならないで教室に戻る。一人で抱えようとする。その言葉が思い出される。でも僕は誰かに頼るなら頼らず抱える。誰かに迷惑なんてかけたくない。

嫌な性格だな……。でも孤独は嫌だ。誰かと話したい。遊びたい。繫かれていたい。

階段を降りながら苦笑いする僕だった。

少し前

私は昼休み月下先生を見かけた。何で一人で屋上に向かってるんだろう?……。後を追つてみることにした。

ガラガラ

教室に入る

「受験ナガリで何してたの？」『昇が話』がナガリへ

指掌書

『寝眠。いや一晩まで寝るとわ…』

辰飴は

「アーティスト」

『イイ、テヌヨ。』

「カタコト辞めて」

## 弁当食べる僕ら。

食べ終わり。そろそろ数学（五限）始まりそうな時間…。

## ガラガラ

澪が教室に入つて來た。そして「」ちらに向かつて來る。何か決心した顔で

「ねえ司…。」

『ん? 何お金ならありませんよ?』

「違う…!」

大きな声で言つ。みんなが何事かとこつちを見る。

『怒るなつて…どうしたの?』

「司。私本当の事が知りたい。」

キーンコーンカーンコーンチャイムが鳴る

自分の体が冷たくなる…。さつき会話聞かれた!?

『なつ何のこと?』

自分でも下手くそな演技だなあと思つた

「一年の時、司がやつたことの真実。」

周りの人達にも聞こえたのだろう。ざわざわ騒ぎ始めた。

『えーっと…』

「真実?俺も興味あるな…。一年の冬頃転校してきたから事情はわからんないから」

昇も真面目な顔で言つ。

『授業開始のチャイムがなつたしまた今度の機会に…』

司は逃げ出した。

「いいや、構わない続けなさい。みんなも知りたそだしね。」

しかしまわりこまれてしまった。

『先生…。』

月下先生がいつの間にか教卓にいた。

「逃げないで…。本当の事教えて」  
澪は言つ。

ちつ退路なしか……。

『わかつたよ…。どーから話せばいいのや』

僕は説明した。

（用下先生曰くと云つのは伏せて。仲間にならないうかといつ説いて蹴つたことにして）

私は何であいつがあんなことをしたのか知つた。

あと司は

『嘘だと思つたら体育の渡辺先生に聞け。』

と言つた。

でも私は嘘ついてるなと思つた。あいつは暴力を振るひへりこな  
ら逃げる。それに彼らの仲間に誘われる理由が無い。

私は真実が知りたいのに……。

「司…う

「もういいだろ?嘘をつかなくて」  
言おうとしたら先生が喋りだした。

「君達には本当の真実を教えてやる。」

先生がポケットから何か取り出した。

『先生それは…………なんで?』

司は驚いてる。

「君の部屋から持ってきた。」

黒い笑顔で答える先生。

あれは何だらうボイスレコーダー？

力チツ

「これが真実よ。みんな納得できた？」

私は納得した。多分みんなもそうだろう。

キーンコーンカーンコーン

ちょうどいいタイミングでチャイムが鳴る。

「今日の授業はここまでだ」

教室を出てく先生。

司もそれを追つて行く。

第4・9話（前書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

所変わつて保健室。

『先生? どうしてあんなことしたんですか?』

『...黙秘権を』

何か言い訳をする先生。何故ここにいるかとこうと職員室じや周りが気になるし、屋上じや芸が無い.....。幸い田辺先生や寝ている生徒はいないからだ。

『.....』

何も喋らない先生。

『.....』

対抗する僕。ついでにつぶらな瞳での視線も足しておぐ。

『.....はあつ。負けたよ』

勝利つとガツッポーズしてると

「今日の朝のホームルームでな...、みんな司が居ないと知つて何だか嬉しそうにしててな...。私は君のクラス担任になつたのは初めてだろ?」..

『ええ』

「司がみんなに恐怖の対象に見られてるのが悔しくてな...、本当は優しいのに(小声)」

最後の方は聞き取れなかつたが、理由は何となく理解した。

司に説明し終わったので

「説明は終わつたから職員室に戻つ』『ちょっと待つて』なんか笑顔が怖い。

『理由は理解したけどーなんでソレ（ボイスレーダー）持つてるのはかなあ？』心なしか言葉遣いが……

「それは三限の時に帰つてだなあ……」

『不法侵入したんだあ？これの場所分かるつてことは何回もしたよね？』

「そつそれは……。」

『したよね？』

怖い

『しました。』めんなさい

『んー駄目許さない。罰ゲーム』

「つ何する気だ？」

『目閉じてね』

言われたとおり目を閉じる。

何か近づく気配がした。

先生が目を閉じてる。心なしか顔が赤い……。  
自分の髪を縛つてるゴムを取る。

ファサ顔の横に髪が触れる  
さあてと

先生の頭の側面に触れる。ニヤリ

『田を開けていこうですよ。』

田を開ける

「なつなんだこれは……」

ツインテールにされていた

『可愛い先生（笑）』

からかう回。

「司！－！」

髪どめを取りうとする

『取つちも黙田ですよ。家帰るまでそのままですよ～。』

「何－？」

『ソレが罰ゲームです。取つたら更に罰ゲームですからね』

「ハアツ（溜息）わかったよ

『それと今日は疑いを晴らしてくれて、ありがとうございました。』

背中から鞄を出して帰る回。

「あつまだ授業が……」

「可愛いく――――！」

止めようとして、いざみに邪魔された。

その後は散々だった。職員室で

「「「可愛い！！！」」」

ホームルームの為教室行く途中に

「可愛い！！」

「萌え！！」

「はつ…反則だあ！ー！」

いろいろ言われた。

教室でも同じ事を言われて夕飯のときにも水上と桐原にも言われ大  
変だった。

## 第5話（前書き）

お待たせしました。

田が覚める。時計は六時半を示してゐる。今日は土曜日だから休みか……。

『んー何すつかなあ……』

とつあえず飯作ろう。

朝食を済ませ。掃除、洗濯をする。掃除を終わらせて洗濯物を干していみると

「おはようございます。」

「おはようございます。」

隣から声がした。

『おはようございます夏円さん。秋菜ちゃん』

「今日ねママと一緒に水族館行くんだ。いいでしょ?」

『羨ましいね。』

「えへへ、お兄ちゃんも一緒にいく?」

『悪いからいこよ。』

「ええ~! ? 行こうよ。」

「可いぢやんどうかしら~。」夏円さんが言ひ……。秋菜ちゃんやんなうるつむした瞳で見ないで……。

考える。今日は雨の心配はないし。今円の家賃もみんな持つて来たし特に心配はないか。

『分かりました。一緒にいこうか』

「わーいお兄ちゃん大好きー」「飛び付いてくる秋菜ちゃん  
ガスッ！！

痛い子供なのになんて体当たり。

「あらあら…フフフシ」

笑つてないで止めて下さい。

「つして何故か僕も水族館に行くことになつた。

夏円さんの車に乗つて行く車内では秋菜ちゃんがはしゃいでる。

「楽しみだね～」

秋菜ちゃんが笑顔で言つ。『そつだね。』

「ママ。イルカシヨー見ようね～。」

「はいはい。」

暫く会話していると水族館に着いた。

「早く行こ～。」

夏円さんと僕の手を引っ張る秋菜ちゃん。

入口でチケットの購入で

『ここは僕が…』

「私がだすわ…」

なんてやり取りをし（夏円さんの勝ち）入場。

「わあー。すいーーーー。」

一層はしゃぐ秋菜ちゃん。『やつだね  
色々な魚などを見る。

『夏円さんの蟹す』ことやよ。』

「あらあら、この辺の形が……」

『もう少しこの足が……』

「ママ達もうちょっとメジヤーなので盛り上がり……」

なんて注意もされ……

お廻になつた。 嘘金を食べる廻円を手作りのお弁当だ。

「どうぞ」

「『こだきまへす』」

唐揚げを食べる。

『おいしー』

下味もしつかりしていて冷めててもおいしい。

『この味付けどうしてるんですか?』

「ああ……、それはね……」

料理の話をすると

「お兄ちゃん。 あーん

といつ攻撃が来た。

『へつ?』

マヌケな声を出す。

「あーん!!」

この卵焼きは回避出来ない。 必中かけたなコレ

『……あーん。 んぐんぐ』

「おいしい?」

『うんおいしい』

「私がつべつたのーー。」

笑顔で答える

『才能あるよ』

「えへへ… ありがとわ。」 と褒めると

「咲ちゃん? あーん」

夏円さんまで？！！

『ふえつ？』

「だつて秋菜だけズルイじゃない？」

『ええ…』

「はいあーん（はあと）」若干周りの目が痛い…

『あーん。んぐんぐ』

「おいしい？」

『はい、おいしいです。』

「フフフツありがとづ」

昼食を終えて1時半からイルカショーなので早めに会場に行つて少し後に座る。

「もつと前にしようよ～」『こいこい』が一番だよ。まあ始まつてみればわかるよ』

「お待たせしましたーイルカショーのはじまりでーす」イルカの調教師のお姉さんが出て来る。

暫くしてイルカショーが始まる。イルカが水中から勢いよく飛び出す。そして

ザバーン

再び水中に戻る。

その時凄く水しぶきが前の席の人達にかかる。

キャー冷たーい  
なんて声がする。

『ね?』

「なるほど~」

「じゃあ~今からイルカに餌をあげたい人~」  
会場にいた子供たちが『はいはい』と凄まじく連呼する。  
もちろん

「はーい。」

秋菜ちゃんもだつた。

「お兄ちゃん達も手あげて」

催促されたので

『.....はーい』

「はい」

あげると

「じゃあそこの眼鏡で髪後に結んでる人達~」

へつ?僕ら?指を自分に指すと...

「そり~...それではステージにどりぞーーー!」

拍手で迎えられる。

こつこつから見ると...うわ人多いな...

「はいーーじゃあこの魚あげて下をいね

『.....』

作業的にあげる僕

「それつーーー

「どうぞ」

楽しそうにあげる夏月達

『あつ！…』

一匹足元に落としてしまつ。  
それを取ろうとイルカが突つ込んでくる

ガツ！！

足払いされたようになり

ザバーン

水に落ちた。うおー！もがく。やばつと思つたら  
イルカが押し上げてくれた。

「司くん！？」

「お兄ちゃん！？」

「アハハハハハ。」

会場の子供たちは落ちたことが可笑しかったのか笑つて  
いる。  
すぐに上がつてくる司くん

髪留めがとれたのか前髪で顔が全部隠れてる。

ザバツ

『ふはあ！…いやーびっくりした。』

前髪をかきあげて顔を出す司くん

「「へつ？誰？」」

見慣れぬ美少女（少年）？がいた。

## 第5話（後書き）

最後の部分（素顔を見せる）がやつて見たかったんです。そのため  
にわりと長文に…

夏

月さんは普段はちゃんとづけです。シリアルズ？ 時はくんで呼びます

第5・5話（前書き）

お待たせしました。待つてた人ごめんなさい。

「「へつ?誰?」「  
いきなりそんなこと言われた。

『司ですよ?』

眼鏡をしてないから、どれが夏月さんかわかりにくい。  
「ホントに司くん? ああ・・・水に落ちたから・・・」

そんな、らま1/2じゃないんだから・・・。

『いえこれが素顔なんですが・・・』

何とかイルカショーを終え濡れた僕はスタッフルームへ案内された。

『へつくしー!』

「ああ、こっちのシャワールーム使って。服は洗濯するから置いて  
おいて」

イルカの調教師のお姉さんが言つ

『はい。』

がちゃ

ん?これが蛇口でお湯はこつちだな・・眼鏡ないと不自由だな~  
蛇口をひねる

ザア~

『温かい』

そういうえば代えの服と下着ビビょう・・・

「代えの服と下着こじりおじとくね~

『あつ、はい。ありがとうございます。』

「ごめんなさいね今日は、」

『いえ、じつちの不注意だつたんで・・・気にしないで下をこ。』

「ありがと・・・」

ガチャ

シャワーを浴び終わり服を見る

これ全部売店で売ってるやつだ。魚がプリントされてる。

「着替えた?」

『あつはい。』

「じゃあ、じつち来て?』ソファーティ座る

「今日は本当にごめんなさい。あとコレ」

壊れた眼鏡と家の鍵と濡れた財布を渡される。

『げつ・・・これは見事に壊れていますね。』

レンズにヒビ。フレームべくわくわく。ええっと家に「ンタクトレンズあつたよなあ」。

「携帯電話は見つからなかつたの...ごめんなさい。」『ああー僕、携帯持つて無いんですよ。』

「えつ!? そななの?珍しいわね。あと濡れた服は後で送るわね。住所教えてもらつていい?』

『あつはい。』

メモに書いて渡す。

『もつ戾つていいですか?』

「あ、うん。今日はごめんね。あと、『来店ありがとうございます。』

た。』

よく謝る人だなあ...なんて思いながらスタッフフルームを出る。

『「じつよへ夏円さん達どりだらへ..』  
キラロキラロしてゐる。

「司ちゃん? よね多分...」後から声がある

『「その声は夏円さん?』

「正解!。災難だったわね。」

『「ええ。あれ? 秋菜ちゃんは?』

「寝ちゃつたわ。はしゃぎ過ぎたんでしちつね。」

『「もうですね。閉館時間も近いし、そろそろ帰りますか?』

「もうね。帰ります。」

後部座席ではスースーと秋菜ちゃんが寝てゐる。「司ちゃん? 起きてる?」『「ええ。』

「今日は楽しかった?」

『「はい楽しかったです。夏円さんは?』

「楽しかったわよ? 司ちゃんの顔見れたし~

『「えつ~?..』

「こんなに綺麗だったなん~。女の子と間違えちゃうくらい。『「からかわないでください。見慣れた顔なんで特に何も思わないんです。』

「へえ~お化粧したら完璧に女の子なの!..』

『「怒りますよ? 女の子みたいで小さこ頃凄まじく嘲られた台詞なんですか?..』

「あ~あら、『「めんなさいね。』

『「もう笑いながら謝らないー。』

家に着く

『今日はありがとうございました。』

「どういたしまして。」

辺りはもう暗い。

「ねえ同くん？」

『はい。』

「私たちやんとあの子の母親に、なれてるかしら……」

『えつー。』

「不安なのよね」

『突然な質問ですね。』

「ええ、何となく同くんに聞いてみたくなつて…。やっぱり父親がいないと駄目かしら…。」

『んーわかりません。僕らはずつと爺さんに育てて貰つてたんで…。』

『』

「そつか…。変なこと聞くけど両親がいたらな…。とか思わなかつた？」

『無いですね。爺さんだけで充分でしたよ。だからあんまり気にしない方がいいですよ。』

『うん。悩んだつてしまいか……。よしー頑張る。』

『その意氣です。それにその気になれば夏月さん美人だから簡単に田那さん見つかると思いますよ~。』

「またお世辞?」

『いえ…。本心です。』

「ふーん。なら『司』へん貰おうかしら… 美人だし、家事もできるし、優しいし…」

『またまた御[冗談を… それにまだ僕16,デスヨ?』

「気にしないわよ。」

『えつと… その…』

『司』はまいりまいりしている。

「…[冗談よ。 (少しね)』

『その[冗談は勘弁してください (泣)』

「フフッ。今日は色々とありがとひ。またね」

バイバイと手を振つて帰つて行く夏月さん。

『……疲れた。帰つて寝よ。』

今日は早めに寝ようと思つた司でした。

## 第5・5話（後書き）

現在忙しく更新が余りできないです。でも頑張って書いていくでし  
れからもよろしくお願いします。

## 第6話（前書き）

リアルにすることが多くて大変です。更新遅くてすいません。

## 第6話

今日は日曜日。

眼鏡の代わりに「コンタクト髪を纏めるゴムが無し。

『うーんコンタクトはなんか嫌なんだよなあ…。』  
目に入れるのが嫌いなんだよなあ

なんて思いながら掃除をしていると

ガラガラ～

「『いのんぐだわーい。司いのー?』

「」の声は円下先生だ。

『はーい。』

玄関へ行くと…

「えーっとたしか…その顔は…司だよね?…どうしたの顔（眼鏡）

『いや～色々あつまして…』

昨日の「」と話をす。

「へえーそうなの。」

『先生はなぜここに?』

「ああ…今日買い物に行くから荷物持ちに君を誘いに来た。」

『デートですか？わーい』

「荷物持ちだ。」

『ええーめんどい。』

「金曜の帰りのホームルームサボったよね？その罰に課題出してあげようか？」恐いなあ……。ツインテールが効いたんだなあ……。

『酷つ！分かりましたよ。手伝いますよー。』

まあ眼鏡屋に行きたかったからいつかと思い、支度をする儀。んーこんなもんかな？

『先生。お待たせ』

「じゃあ行こつか。」

『何処に行くんですか？』

「市街の方に……」

『結構遠出ですねえ』

先生は車はもつて無いから（免許は有り）電車で行くことにした。此処から駅は近い。徒歩5分。大学にも近いので卒業したら是非……じゃなかつた……片山から市街は電車で50分ぐらいだ。

電車内にて……

「あの二人綺麗だわ……姉妹かしら？」「美人だなあ……」「オイ。ナンパしてみない？」

『僕男なんだけど……。』

「ブツ。クククク。」

『笑わないで下さい。』

なんて感じな一人でした。

市街につくと  
やつぱり都会だな… 人が沢山。

『先生。 今日は何買うんですか?』  
「うん? 服とかかな…」  
『何処で?』

「歩きながら決めるわ。 あつこー入ってみよー。」

『あつー! 待つて下さいよ~』

先生はテキトーに服屋に入つて服を選ぶ。

「これはどう? 司?」  
『んー似合つと思いますよ?』  
「はつきりしないな…』『可愛いですよ。』先生が赤面する。熱  
でもあるのかな?  
「うん。 これ買おつー!」  
レジへ行く先生。試着しなくていいのかな?  
「次のお店いくよー 司ー!」荷物を僕に渡す先生。  
先生楽しそうだなあ

しづらしくして

結構買ったなあ。両手にこつぱいだよ…。お皿いじ飯食べたいよ…。

『先生お匂い飯にしましょ?』

「ん? (時計を見る) そつね食べよつか。」

『何処で食べます?』

「その辺でいいんじゃない?」

適當だな先生

『じゃあそこで…』

近くにあつた定食屋へ入つてく僕らでした。

## 第6・5話（前書き）

あけましておめでとうございます。読んで頂いて感謝の極みです。

定食屋に入る。

「いらっしゃいませ～。あつ先生！～？」

澪がいた。

「林、バイトか？」

「あー、家の手伝いなんで…」

看板に林食堂つて書いてあつたな…成る程。

「そうか」

「そうなんです。でその隣の美人は誰ですか？」

美人？誰が？澪がこちらを向く。そういうえば素顔？知ってるの学校の生徒では居ないな。

実際数える程しかいない

『初めてまして。僕は月下 やしづ 社遙さんの従兄弟です。』

うむ、騙してみよう。

「あつそりなんだ。より…『ゴン…』

先生の拳が頭にヒット。

「『同』。嘘をつくな。」

「え！？」

痛いです…言葉にならないです。ばらさないで下さい。あれ？

『オーラ澪？』

固まってる

『おーい

「ええええええ～！～！～？？」

『飯を食べてたお客様たちが何事かとばかりを向く。

「どうしたの！～澪？』

綺麗な女性が厨房から顔を覗かせる。

「何でもない～！～知り合いが来ただけ～～！」

なんか』「まかす澪さん  
顔を掴まれる。

「先生……」  
『それ本当に司?』

『顔をフニフニされる。変装じゃないぞルパ  
じゃないんだから……』  
『残念ながらそれは司だ』『ひほおいれふれえ（ひどい先生）』  
手を離す澪。

『痛いな～客だぞ。丁重に扱え。』

『これが司?！…ブツブツ…』下向いて独り言。

『あの～そろそろ席に案内してくれません?』

澪の顔を覗く

「あつ～～『メン』ひびきわ～～  
席に案内される。

『』注文がお決まりになつたら御呼び下せ～。』

去つて行く澪。うん接客モードだな。笑顔がなんか胡散臭い。

『何食べます?先生?』

『ん一日替わり定食かな…司は?』

『』の鰯の味噌煮定食にしようかと……』

『…めつたと好みだな…』『まつとこ下せ～～すいませーん

澪を呼ぶ

『はー～』

『田替わり定食と鰯の味噌煮定食下せ～。』

『はこ少々お待ち下せ～。』

『』飯食べたあとビーフをます?』  
『同はビーフしたいの?』  
『眼鏡を買いたいです。』  
『やういえば、いつも眼鏡なの?』  
『田に入れるのが嫌いなんですよ。』

「へえ。」

なんて他愛のない会話をすると

「お待たせしました。鯖の味噌煮定食は?」

『僕です。』

「日替わり定食はいかがですかね。」

テーブルに置く。

「伝票はこちらに置いておきます。」去つていく澪。

『「いただきます」』

食べる僕ら

食べ終えて会計を済ませようとレジへ。先程の綺麗な女性がいた。会計を済ませると女性が話しかけてきた。

「先程は娘が失礼しました。澪の母の梓です。」

『えええ!? こんな美人が? 姉かと思いました。』

びっくりする僕。

「あらあらお上手ですね。」

笑顔の梓さん

『いえいえホントに…』

「お母さんを口説くな

スパン

澪に頭を叩かれる。いきなり姿を表せやがつて…。やるな…

「お母さんも嬉しがらない。恥ずかしい…」

『痛いな自己紹介をさせてよ澪。』

「私は担任の月下 遥です。」

あつ先越された

『同じクラスの古木 同です。娘さんにはお世話になつてます。』

笑顔で挨拶。こっちみんな見てる…あれ?みんな顔が赤い風邪かな? 梓さんが僕らの前に来る。

「娘をよろしくお願ひします。」僕らに頭を下げる梓さん。いい…

母親だな……僕のは……嫌な記憶だ

『はい任せましたあつー！何なら嫁にでも…ああもちろん梓さんをですよ？』

えつ？／／

ପାତା ୧୮୮

## 緊急回避！！

前に跳ぶ……やはり前に梓さん居るから避けるな……

ゲフツ

前は吹く形はされる儀  
息でさなし…あ…!!

ドンツ

「ツオキ」

梓さんにぶつかり倒れる梓さんと僕。このままだと梓さんが僕の下敷きに…。抱き着いて体の位置を代える

二二二

けふう！！はあこ

床硬えなあ……息できないよ。  
何か柔らかいなあ……梓さんが胸にいる  
。ヤバイ！

「何お母さんに抱き着いてんのよー。」「つづく

赤面中な梓さん。回復する前に頭を蹴ろうとする澪。

卷之二

「落ち着け澪。それはマズイ。」遥さんが止めてくれた。

ああ女神がいる。

何とか澪に落ち着いて貰う。早く出よう

『ご馳走様でした～。』

「また来て下さいね／／／。」

「一度と来るなー」

店を出る。

『あー痛かった…。』

「……。」

あれ、怒ってる?

『どうしたんですか?』

「別に…。」

『機嫌直して下さいよ～。』

「……ふう。わかったよ。」

『じゃあ。眼鏡を買いに行きましょ～』

先生の手を引っ張る。

「つ／＼／＼。引っ張るな

何か照れてる先生。

眼鏡屋に着く。

『ん～フレームどれにしようかな～。』

いろいろ掛けてみる。

「適当でいいんじゃない?」

『ん～。先生も掛けてみません?』

「何で?」

『いやただ見てるのもつまらないでしょ?まあ、眼鏡姿の先生も

見てみたいんですよ。』

「うん…仕方ないな。』

どこか嬉しいそうな先生。』

「んつ…。どうかな?』

『似合つてますよ。かわい

「可愛いいい~』

ん?声がする方を向くと

田辺先生がいた。

『これなんてどうです?』

## 第6・5話（後書き）

話数に0・5とかは変ですね。 いずれ繋げておこうと思っています。

## 6・6話（前書き）

長らく待つてた人（いるねのかな？）お待たせ

『……』

ヤバい弄られる。

「遙ちゃん可愛い。眼鏡の遙ちゃんなんてレアだわ~」携帯を取り出すいづみ先生

こちらには気づかないようだ。

「こら抱きつくな。カメラで撮ろうとするな。」

美人二人が並んでるから店員も見てるよ……。

「司ー！そこで他人の振りしてないで助ける！」

「古木君もいるの？」

ふつ…甘いな先生。いづみ先生は僕の素顔を知らないのさ。この眼鏡なんてどうかなあ…アハハハ

『～』

「そりか…そんなに私の課題がやりたいのか」「凍えるようなオーラが放出されている…怖い…

『アハハハ～僕、古木司でえつす。』

ヘタレなので即答する。

「この娘が？またまたあ…古木くんがこんな

『いづみ先生は僕の兄さ

「司くんだわ」ギツ！？』

先生それ以上言わせないよに足を踏まないで下をこ痛いです。

『……と言つわけで遙先生の荷物持ちやつています。』

「デート？」

「どうしてそうなる…」

「いづみは何でここにこるんだ？」

「買い物よ。お店の外から遥ちゃんが見えたから、何してるのかな  
?と思つてね。」

「人は話こんでるようだ。

『ん~とりあえず眼鏡これにします。』

二人は聞いてないようだ

何の面白みもない一般的眼鏡をとる。

『店員さーん。これ下さいな』

「はい／＼／＼こちらで視力計りますので、あちらへどうぞ。」

店員なんか照れてるな…なんでだ?

「レンズが2時間後に出来上がりますので…、2時間経ちましたら  
お越し下さい。」

『はい。』

まだ先生達は話をしているようだ。

「司ちゃんの……の服……みない?」

「ほう……なら…」

何か嫌な予感がする…

『あと2時間かかるみたいですね。』

先生達に話しかける。

「司ちゃん? これから…司ちゃんの服選びしない?」 先生達の目が  
何か面白い玩具を見つけたように輝いている。

『いえ…服なら間に合ってます。』

「大丈夫だ。試着だけで買ははしない。」 ガシリと両方の腕が掴ま  
れる。

『あの…』

ギリッ

『「何?」』

『なぜ僕の両腕をホールドしているのでしょうか?』

「逃がさないためよ。」

『逃げるっ。』  
なぜと考えながらズルズルとある所へ連れて行かれると理解できた。  
くねう…

『あの…、ここは』  
「なに? 問題ある?」  
『ここ女性服売り場ですよ?』  
「なに? 問題ある?」  
おぎや ぎですけど何か問題でもみたいに言われても…  
『僕、男、OK?』  
「大丈夫だ。似合つから。」  
『そう言つ問題じゃない!…!』

司の悲しい叫びが木靈した。

## 6・6話（後書き）

いそがしいです書くまで気力がまわりませんでした。  
すみません。これからはもう少し頑張  
つて書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3737c/>

---

大家さんは高校生

2010年11月17日14時33分発行